現代型うつ病と他責的思考に関する研究

原蒼馬
指導教員　三船恒裕

研究背景

従来型うつ病像とは異なる特徴を示す抑うつ状態として「現代型うつ病（新型うつ等)」が注目されている。現代型うつ病は対人過敏性や自己優先志向、他責的認知などが指摘される一方、統一的な評価尺度が十分に整備されていない。中核特性とされる他責傾向を定量化し、抑うつ症状との関係を検討することが課題である。

研究目的

現代型うつ病に関連するとされる心理特性（他責傾向、自己愛傾向、対人過敏・自己優先傾向、自尊感情）と従来型抑うつ傾向（QIDS-J）の関連を検討し、仮説「現代型うつ病傾向が高いほど従来型抑うつ傾向も高い」を検証した。

研究方法

社会人 204 名（平均 45.1 歳）を対象にオンライン質問紙を実施した。他責傾向は楽観的帰属様式尺度を応用した 10 項目（外的帰属=1、内的帰属=0 の合計）で測定し、自己愛（NPI 短縮版)、対人過敏・自己優先、自尊感情、QIDS-J を併用した。因子分析・信頼性を確認後、相関分析とクラスター分析を行った。

分析結果

他責傾向と従来型抑うつ傾向の相関は有意ではなかった（$r=.176$, n.s.)。他責傾向は自己愛傾向と正の相関（$r=.176, p<.05$）を示し、対人過敏・自己優先傾向は従来型抑うつ傾向と負の相関（$r=-.381, p<.01$）を示した。クラスター分析でも「現代型うつ病特性が高く抑うつも高い」群は明確には確認されず、仮説は支持されなかった。

考察・結論

他責傾向や自己愛傾向は従来型抑うつ傾向と直接には結びつかず、現代型うつ病関連特性が一様に典型的抑うつ症状を強めるとはいえない可能性が示された。限界として、他責傾向の測定精度、QIDS-J が現代型特有の症状を捉えにくい可能性、平均年齢の高い社会人サンプルである点が挙げられる。今後は他責傾向の測定を精緻化し、現代型うつ病の特徴を直接測定できる指標を整備したうえで、若年層や臨床群を含めて再検証する必要がある。